

震災の津波で両親失った 菊地将大さん(21)



国連防災世界会議のシンポジウムに向けた思いを語る菊地将大さん＝2月22日、宮城県気仙沼市

「僕たちだから変えられる」

国連防災世界会議シンポに参加

仙台市で14日から始まる国連防災世界会議のシンポジウムに参加する筑波大3年の菊地将大さん(21)は、東日本大震災の津波に両親を奪われた。「被災した僕たちだから、変えられるはずだ」。昨夏、台風被害の実態を学ぶため訪問したフィリピンで被災体験を語り合った現地の学生とともに、若者の視点から防

災の重要性を訴える。

受験や自分の将来について漠然と考えていた高校2年。震災が起きた。大きな揺れの後、津波の襲来を知らせるサイレンが鳴り響いた。若手県陸前高田市の自宅にいた菊地さんは慌てて近くの高台へ避難した。黒く大きな波が町を襲った。父、博幸さん、当時(49)と母、陽子さん、同

(41)は、その波にのみ込まれた。

3月下旬、遗体安置所で両親を見つけた。間に合わせのひつぎに納められた遺体は傷つき、一目では分からなかった。涙がこぼれ切れなかった。

だが、時間が経過し復興が進むにつれ、周りの景色にも自分の心の中でさえも、あの日の記憶が消えていく。「被災した自分たちこそ防災を学び、伝える責任がある」と決意した。

2013(平成25)年11月の台風で多数の死者や行方不明者が出たフィリピンを訪れた。なぎ倒された木や暴風に耐えきれずつぶれた家。目にした風景は震災後の故郷と似ていた。

現地の人の被災体験を聞く中で、住民同士で声を掛け合い、障害者をうまく避難させたという話が心に響いた。災害はどこでも起きると感じた一方、誰もが実践できる簡単な方法で犠牲者を減らせると確信した。

両親の死や海外の被災地訪問。この4年間で目にしたこと、聞いたことを、うまく伝えようと文章を練る。「災害時に役立つ、基本的なことを伝えたい」。当日は背伸びせず、等身大の言葉で伝えるつもりだ。